



詩集

迷途のみやげに

ならちゅん

MEIDO NO MIYAGE NI

詩集

迷途のみやげに

ならぢゅん

目次

目次	3
空へ	5
この赤いのは	8
夜	10
人魚	12
愛染	14
再会	15
白骨	17
エスカルゴ	19
自由輪奇譚	25
夜汽車	26
前夜	31
さまようものたち	34

連作 武蔵野凡父録	40
一・家路	40
二・天秤	41
三・胡坐	42
四・辛盃	43
五・待ち人	44
.....	46
くせ字	47
水母、微光性の	49
希望 長くは続かない	51
取引き	52
やがて角の生える日	54
あかあかと	56
あいさし	59
迷途	61
あとがき	64

空へ

空が高い

いや空が遠い

空は無色透明な広がり

そこには何も無い

そんなこと当たり前前過ぎるかな

ではもう一つ

空は遠ざかりつつある

僕等を見捨てるかのように

その速度がどんなものか

僕には知る術もないけれど

鼻につんとくるほどの

静けさ

雲のむこう側は

きつと

狭い路地に突っ立って

遠ざかっていく空を見ていた

おっこちてくる雨がひどく冷たく

嘲笑われているような気がした

からっぱの頭がびしょ濡れで

からっぱなのに重くてしかたない

本当は何か叫びたかったんだ

でも何を叫んだらいいのかわからなかった

とりあえず「あい」とつぶやいてはみたけど

かえって疲れてしまっただけだった

むしろゴミバケツをあさる野良犬みたいに

意味もなく吠えてしまえば

良かったのかもしれない

空が高い

いや空が遠い

この赤いのは

ああ血だ、この赤いのは血なんだ、のんきなペンキなんかじゃなく動物が生きるために使用すべき血液なんだ、それがむやみやたらと流され無差別に流されありとあらゆる時代がありとあらゆる戦場に流され、泥に混じり糞尿に混じって草を枯らし土を腐敗させ、しかもそれはひげをそってて想われニキビにかみそりがひっかかったのではなくゴール前でスライディングタツクルしてすりむいたのでもなく、銃弾や爆風や放射線や爪や牙や角や妙な形の脳みそや藪睨みの眼球が皮膚を破り心臓を押しつぶし胃腸肝臓膀胱をひっかきまわしてぐにやぐにやにして流れた血なんだ、それがマラリア色の難民の眼の中にべつとりと流れ込んでしみてしみて眼をこすりつつ台風一過の青空と自衛隊の軍用飛行機を眺めて平和な反戦デーだと思ふ心にぽとりと滴り、いもりの黒い影がアジア中をうるつきまわる、血だ、この赤いのは血が流れ流されどくどくあふれふきだし恋人達を黙らせ愛撫される乳房を痩せさせ俺のノートを下手な文字で汚し、それでもまだ飽きた

らずに流れあふれて人と人の腹の中のサナダムシと人
の足の下の地面を醜く一色に染めて殺し殺され滅んで
いくものの泣き声を軍靴の音でかき消してしまふのは
この赤いねばねばした血液なんだ

夜

あなたと踊っていたいのです

もう誰も裁きにこない

いつまでも

ここで

ふやけてゆく

腐ってゆく

私の手

ゴルゴダ

モヘンジョダロ

覚悟はできています

いさぎよく受け入れること

「そろそろ帰りますか

おくらせて下さい」

何も信じていません

何も恐くありません

もう誰にも測られることはない

死と

未来と

死と

未来と

夜

「また電話します」

人魚

海の音が聞こえる

君は微かにつぶやいた

覚えたての呪文を

試すように

ビルの谷間

僕らは海を探した

波頭のきらめき

熱く灼けた砂

高速道路を駆けてゆく

孤独の群れに

脅やかされながら

夜明けに僕は海をみつけた

金星のまなざしさえ届かない

閉ざされた場所で

君の胸の中に

真夏の海を聞いたのだ
くずれてゆく波の飛沫
ぬれた二人の体から

貝殻が

こぼれ落ちる

愛染

窓を開けてごらん

おとむらいの鐘が聞こえるよ

悲鳴も

すすり泣きも

そして銃声も

みんな聞こえるんだよ

ほら

耳を澄ませてごらん

誰かが笑う声

裸身を抱きしめられる

背骨のきしみ

鋭い爪が

シーツを引きさき

やがて

うぶ声があがる

あれはみんな

愛の音なんだよ

再会

私は楓を見ていた

秋風に揺れる楓の葉を見ていたのだ

葉の裏側に心をあずけてしまうと

向こうから女が走ってくる

これは再会に違いない

私はそう思う

むしろ

そう思いこまされてしまう

私は両腕をひろげる

日の光が降りそそぐ私の胸に

女が飛びこんでくる

女の名を叫べ

だが私は

その名を知らない

女は私の体を透りぬけ

駅に向かって走ってゆく

夕映えする楓の葉を見ていたのだ

そして足元に落ちてきたその葉と

私は再会する

白骨

よそ見をしながら男が歩いてくる

よけなくてはいけない

そう思いながらも却って

男の猫背に吸い寄せられてしまう

ぶつかりあう肩と肩

骨に痛みを感じる

何歩か歩いてから振り向くと

男もやはりこちらを見ている

怪訝そうな顔つきだ

僕は憎悪する

そして気付いてしまうのだ

ポケットにはナイフがある

ポケットの中でナイフをつかむと

頬が勝手にニヤリと緩む

冷たい感覚

血

血が心の刃先を濡らし

ねじ曲げられた首に

無様な会釈を強いる

夜とナイフに関する話は

これで終わりだ

裸の樹木が凍りついたまま

白骨のような枝を

街灯に照らされている

エスカルゴ

北炭夕張炭鉱ガス突出事故に寄せて

食用蛙はまだましさ

あいつら悲鳴を上げられる

血の染み着いた俎板の上

冷たく光る包丁の刃が

腹を引裂くその瞬間に

グエロウっと一撃

復讐できるんだ

ベテランのコックでさえ

月に一度は蛙の夢をみる

だけど俺達やあ血も流せない

薄汚い粘液まみれ

ドカンだぜ

蝸牛炭坑爆発事故の犠牲者は

十五名と発表されました

千切れた手足

とぐる巻く大腸

血まみれの石炭が

ヌラヌラヌラ

おい目ン玉飛び出ちまったぜ

ついでにツノ出せ

カタツムリ

ダチヨウさんはお幸せ

狭っ苦しい檻ン中

いくらボロボロに成り果てても

あんたら絶対喰われねえ

今日も視察団ご一行様のご来園

ご慈悲深いご婦人方の

憐れみの涙はマスカラ色

まあ御宅の猫ちゃん避妊手術はまだですの

そそくさと視察を終えて

御食事は華やかに

その御美しい御唇で俺達を御喰いになる

奥歯の間で体は弾け

流れる体液はソース混じりのヌラヌラヌラ

ドカンだぜ

蝸牛炭坑爆発事故の犠牲者は

四二名となりました

石炭殻にすっぽり埋もれて

じっくりじっくり火が通される

焼きすぎだなあ

レアにして欲しいよ

あんた故郷は筑豊だつてえ

そうよあつちは廃坑で今度はメタンの爆発さあ

陰毛が燃える

鞆丸がこげる

カアチャンもうーぺんおまえを抱きたかったよ

おまえの性器はヌラヌラかたつむり

でんでんむし

無私

蒙死

無視

無知

鞭

働け働け又ラ又ラするな

蝸牛炭坑爆発事故の犠牲者は

九三名となりました

まあなんて悲惨な事故でしょう

でもあなたは喰われない

我々の警告にも関らず貴重な生命が失われた

でもあなたは喰われない

安全対策には万全を期しておりました

でもあなたは喰われない

早急に調査のうえ善処するよう指導を行う

でもあなたは喰われない

喰われるのはエスカルゴ

昨日は俺の親父がやられた

これ以上又ラ又ラ又ラ又ラしてらんねえよう

ドカンだぜ

慈悲と憐憫をドカン

啓蒙と指導者をドカン

お茶の間もドカン

政策も戦略も収益も

ドカンドカン

ちくしょう何もかもドカンだ

蝸牛炭坑爆発事故の犠牲者は

三九億名に達しました

あんた何ン人殺せば気が済むんだい

赤く濡れたペン先に

隠し切れない笑顔が映ってる

手枷

足枷

檻の中

しよせん俺達やあヌラヌラなんだ

こればっかりはどうしようもないぜ

俺達が生きてるってだけで

世の中粘液だらけになっちまうんだから

銀色粘膜に包まれた

ほのかに光るヌラヌラ都市に

今日も俺達のヌラヌラが

行くあてもなく漂っている

沈んでゆく太陽

やがて石炭色の夜がくる

あとはヌラヌラ酒をあおるだけの毎日

なあみんな成仏してくれよなあ

明日は俺が

皿に盛られる番だ

参考文献：増谷栄一・北炭夕張炭鉱の悲劇 - 昭和小史・彩

流社・1996



自由輪奇譚

何を信じようと君の自由だ

例えば太陽のしずくに

そんな声を聴くこともあった

春の午後

緑の土手を行く僕の耳に

注ぎ込まれた生暖かい謎

男達は空井戸を覗いている

黒い頭を寄せて

冷たく光る井戸の底を

静かにみつめている

僕が信じたのは

自転車のペダル

大地に届けとばかり

明日に届けとばかり

踏みぬいた

砂埃に混じる雲雀の声を

向かい風になびかせながら

空井戸の底に

男達が降り立つ

無言のまま

干からびた肉塊を

祭壇に運ぶ

回る

ホイールが回る

僕が回しているのだ

ああ雲雀が鳴いてやかましい

回す

車輪を回す

僕を回している誰か

注ぎ込まれた生暖かい謎

祈りの声が

井戸を満たす

その底にはぎっしりと

破綻したユートピアの残債が
敷き詰められている

いつの間に忍び込んだのか

僕の頭の中を

雲雀が飛ぶ

その鳴き声が

ひよひよと

頭骸に充満してゆく

司祭の振り上げた斧が

黒く光る

雲雀はもはや

数え切れぬほどに増殖

無秩序に旋回し

内側から頭骨に撃ちあたる

重力に誘われるまま

斧は一息に振り降ろされた

飛散する黒い腐肉

頭骸が開き

翼がこぼれる

痙攣しているのは

筋肉なのか

神経なのか

ついに回転は拒まれ

その時はじめて

ホイールは自由を発見した

惰性で回る後輪

僕は茫然と失われたものを数えている

雲雀が

無数の雲雀が

骨片にまみれたまま

黒い頭骸から

飛び立ってゆく

僕は茫然と数えたものを失ってゆく

男達は黒い鳥影を見送る

何を信じようと君の自由だ

解き放たれた雲雀たちは

やがて井戸を満たし

世界を満たし

一層黒く空を覆った

夜汽車

思い出の数なら

きつと僕だつて負けないさ

失つたものの数も

孤独の鋭さも

君を乗せた列車は君の終着駅に向かう

（おそらくそこは

雪に抱かれた静かな町）

車窓に夜の海が広がる

果てしなく暗く

そして突き刺さるような漁火

君は決してその風景をわすれない

わすれることができない

負けるわけがないよ

罪の深さだつて

臆病さだつて

思いのほか

驕慢なところも

きつと

僕に乗った列車も僕の終着駅に向かっている

そこに何かあるのか僕にはわからない

車窓に星空が広がる

そして黒い鳥が視界を横切る

僕は決してその風景をわすれない

わすれることができない

二台の夜汽車がすれ違う

ほんの数秒の間に

僕等は視線を絡ませよう

君の見たものと

僕の見たものを

そつと交換しよう

きつと僕は君の視線をわすれない

わすれられない

朝日が昇ると僕は

大きく窓を開け放ち

煙草にぼつと火をつける

そして君の視線を

感じなおしてみる

その行く先を

谷間の小さな空に

思い描いてみるのだ

前夜

急に暑くなったせいか、寝苦しくて眠れなくて。プールの底から浮かび上がるようにそつと床を離れた。台所で梅酒ロックを作りグラスを回しながら居間に運ぶ。冷えた甘い液体をきゅうつとすする。ぼんやりと闇を眺めて静けさに耳を傾けて。眠気を呼び込む為の儀式を数え上げる。

襖越しに聞こえる妻と息子の寝息はリズムが一致しない。

明かりをつけて押入れを開いて。無造作に積上げられた本の一冊を手にとって。読むともなく徒らにページをくってゆく。そのうちにふんわりと青い眠気が漂ってくるのを慣れた手つきでさつと捕まえて連れだってこっそりと寝室に戻るつもりだった。古い仲間と居酒屋の暖簾をくぐるように。

氷とグラスの触れ合う音がちりと風鈴を思い出

させる。

こちらの意図などお構いなしに、ボールペンで書き込まれた丸文字が私を捕らえる。見慣れた妻の筆跡十五年分ほど若やいではいるが。そのインクの青色がしみてしみて。ますます目が冴える。最初のページに戻り妻の書込みを辿り直す。学生時代の彼女の思考を追いかけることは、なんとなく前夜の交合を思い返すことに似ている。

僕の陰茎は経血に染まったことがある。

二十歳。出会ったばかりの彼女の肢体が弾むように滑らかに小さな文字に絡んでゆく。

「死は始めから

闇に浮かぶ白い背中

「生きることに

右腕の金色の産毛

「組み込まれていて

熱い頬

「なん十年もかけて

小さな乳房

「育ってゆく

ふともも

くちびる

「肉体を越えて

濡れた瞳

僕は欲情を感じて。耐えかねて。明りを消して。青臭い二十歳の抱擁とつましい前夜の交合をかわるがわる思い浮かべて。暗闇に向かって。そして果てた、実直な老婆のように。グラスの中で氷が溶けて。かちりと小さな音を立てた。

この前、自慰をしたのは、いつだっただろうか。

明日になれば朝が何食わぬ顔をしてやっきて。僕はきつとそのまぶしさに目を細めて。そして萎えた陰茎の冷たい感触を死体のようだったと思い返す。雨戸を

開くと朝顔が咲いている。青ざめた僕の唇に妻は何を
読み取るだろうか。

さまようものたち

あなたの冷たいつまさきを

そっと両手につつまこんで

まだ新しい傷口の

ひとつひとつに

唇をおしあてる

しろい肌を汚した

どろも血痕もすべて

ぼくの舌でぬぐい去ってしまおう

つまさき

つちふまず

アキレス腱

それでもぼくは

あなたの痛みに辿り着けない

ふくらはぎ

ひざのうらのくぼみ

大腿

ぼくの唇は

悲しみの凍土に迷い込んだ

一羽の鳥だ

まくらに顔をうずめて

何かを耐えているあなたの

つまさきが白いシーツを

さまよいは始める

そのかすかなきぬずれに

ぼくは雪解けの音を想う

そのとき鳥は

あなたの中に

静かに飛び立っていった

連作 武蔵野凡父録

一・家路

この街にやってきたとき

親父は十八歳だった

それから三十年

無理も厭わず働いたが

この街に家は建たなかった

転勤先の地方都市に

親父は家を買った

小さな中古マンション

五年に及ぶ単身赴任の末だ

そして俺は帰る場所を失くした

別に悲しくもなかった

ふるさとは始めから失われていた

だからなのだ

俺は息子にふるさとを買い戻す

二・天秤

土地はつれあいの実家から借りることにした

展示場をめくり、見積り、値引き交渉

明日はいよいよ契約

そんな所まで来てしまった

「家を建てること」にしたよ

電話で親父に報告する

「土地を用立ててもらったんだ

親父からは援助の話は出なかった

出そうにも金の余裕がないのか

もとより思いつきもしないのか

寂しさを秤にかけてみる

或いは助けを求める言葉を

待っていたのかも知れない、十年も二十年も前から

俺と親父の真ん中で天秤は静かに止まった

三・胡坐

近眼、蓄膿、お人良し

つまらぬとこばかり親父に似ている

酒飲み、理屈屋、本の虫

近頃はますますだ、恐妻家なところまで

夜毎の無理な残業で

疲れ果てているのに眠れない

親父も確かそうだった

明け方、一人で煙草を吹かしていた

阪神ファンは親譲り

家族と過ごす時間がないのもそうか？

ならば子煩悩はどうだろう？

親父もそうだったのか？

胡坐の上で五歳の息子がテレビを見ている

俺もそんなふうにごろごしていただろうか？

四・辛盃

日曜日の午後、スーパーで酒と刺身を買った

「なくなるのが早いんじゃない？」を妻？

「そんなことないぞい声を荒げてしまう」

一・ハリットル入れの紙パックが妙に重い

盃を重ねるうちにふと新婚当時を想う

「これ何処で買ったんだっけなあ？」

「商店街の角の瀬戸物屋じゃなかった？」

あのころ酒はもっと透き通っていた気がする

眠りに落ちるまでの数時間

酒を支えに、再び始まる一週間の予感に耐える

抜け殻になった紙パックが積上げられてゆく

怪訝そうに酔眼を見上げる息子の

いつの日かその手が触れる盃は

どんな酒に満たされているのだろうか

五・待ち人

どこに行こうかと迷っているうちに

短い休暇は終ってしまった

「なんだか俺の人生のようだな

苦笑いの蜘蛛の巣が頬の辺りに纏わり付く

「あの夏のことならもう心配ないさ

いつでも見に来いよ

ホルマリンに漬けてあるから

十七歳の俺がささやいた

標本守りなんかやめてしまえば良いのに



ふと漏らしたつぶやきに十七歳が立ち上がる
うち砕かれた試験管から暑い夏が広がってゆく

ガラスの細片を踏みしめて立つ

十七歳の傍らには俺の五歳の息子

二人して壊しにやってくるのだ、俺を

くせ字

わたしはいつか書きしるす

ほんとに愛したひとびとの名を

ひとかく ひとかく

きちょうめんな旧字体で

ほんとに憎んだひとの名も

いつかは書いておくだろう

愛と見わけのつかぬ文字

ひと筆書きのすずしさで

わたしはいつか夢をみる

なにも書かないわたしについて

その夢を書きとめるには

どんな速さの文字がいるのか

わたしは書いた

わからないと書いた

錆びた折れ釘を

幾度も地面に走らせた

水母、微光性の

わたしと

そのとなりの若いおんなと

そのとなりの中年おとこと

そのとなりの

車窓ガラスに映る姿は

みなすつかり

透き通ってしまつて

黒い景色が容易に

突き抜けてゆく

雪が見たい

闇夜に沈まぬ薄明るい雪

に覆われた村が

熟睡する老母の森が

田畑が

山脈が見たい

唐突に激しい警笛

停車駅の向かいのホームから

男がふる

一層おぼろなわたしを貫き

線路の上に積もる

わたしと

そのとなりの若いおんなと

そのとなりの中年おとこと

そのとなりの

轢死体のある景色が通過してゆく

雪が見たい

夥しい雪片を

吸い尽してゆく夜の海が

見たい

希望　　長くは続かない

男はショートホープを愛していた

時としてセブンスターや

ラークに浮気することもあったが

結局はショートホープに戻ってきた

軽い煙草は数ばかり増えてね

決して長くはなかった人生の晩年

男は諦めたように

ホープライトを吸い始めた

男の口から吐き出される煙は

すっかり軽くなっていた

高く高い煙突から

夏空に吸い込まれてゆく

男の遺煙ほどに軽く

取引き

婚約記念に貰った腕時計をどこかに失くしてしまった。大むくれの妻に言わせると、神さまか誰かの啓示なんだそうだ。結婚なんかなかったことにしなさい。返す言葉に窮していると建築業者から電話だ。もっともらしく眉をひそめて現場に出かけた。

その赤いハンドバッグは湿った盛土の上に置かれていた。ビニールにくるんで埋めてあったというが、それにしても色が鮮か過ぎる。お心当たりはございませんか。施主様にも事情が判らないとなると、届けやらなにやら、ちよつと面倒なことになるかも知れませんが。さびた口金をそつと開くと、折り目正しくたたまれた離婚届があった。女の白い手が目に浮かぶ。苦い想いを葬る慎重な手つき。どこか見知らぬ街で、見知らぬ女の想いが、息を吹き返すような気がした。取り壊した借家の住人が捨てたんでしょね。管理を頼んでた不動産屋にあたってみて下さい。

帰り途、ディスカウント店で時計を買い電車に乗った。座席にからだを預けると、また女の白い手だ。向かいの席で文庫の頁をめくる指が、離婚届の女と似ている。妙に長い指。目が離せられない。白い手がしだいに静かに光り始める。その周りはむしろほの暗く、次々と闇が吸い寄せられる。中でもひととき濃い暗みに女の長い指が沈んでゆく。少しずつ。喫水線が手首の骨の突起を洗うと、白い皮膚がくすぐったそうに粒立ち、今度はそつと指を引き上げ始める。幾度かのまばたき。ふいに赤いマニキュア。その先には、なくした時計が、だらしなくぶらさがっていた。文字盤を滑る秒針に安心した僕は胸ポケットから一枚の紙を取り出す。離婚届。その文字に女も安堵したようだ。差し出すと時計をよこしてきた。取引きを終わると僕はそれぞれ時計と離婚届とを闇に滑り込ませた。微かな落下音を聞きながら僕らは小さく会釈を交した。

湿りを帯びた闇が何くわぬ顔で散り拡がってゆく。その一片が買ったばかりの時計の文字盤に落ちて、黒い針は三本ともありかが判らなくなった。

やがて角の生える日

たけちゃんはやしかったのだ

ちよーかつちよいい消しゴムを

むりやり下手くそな字でよごされて

ごしごしこすってみても

マジックだから消えねえよ

絶対になくしっこない

消しゴムだったのに

もしも、もしも失くしても

くそーっなんて言わないで

静かになみだをかみしめられたのに

オニちゅうとあだ名された

先生の文字で

たけちゃんの名まえが

にじみ

かすむ

校庭に降る雨は

先生の大好きな

アジサイやアサガオを育むのに

やっと涙のおさまったたけちゃんに

小さな角が芽を出す

三十六本目の角は

ひとときわ鋭く冷たかった

あかあかと

朝のテレビが叫んだのです

あなたのラッキーカラーは赤って

だから今日はことさらに

血と肉とを

意識していようと思います

皮膚や毛や粘膜に覆われた

日の光の届かない場所で

とろりと赤く流れるもの

ぷるると赤く蠢くもの

どんな臓器にも

母の小さな刻印が感じられます

乾いたカサブタ

搔いたらだめって言われても

とめられない指の動き

の中にも赤く筋繊維が

伸びたり縮んだり

無口な骨にしがみついて

あかあかと痙攣

かがやくいたみ

ふるえ

子供たちの時間は低く飛ぶから

どんなしるべも役に立ちません

声と表情とに隠された蠕動、腫脹、排卵、痙縮、細動、
敗血、滲潤、律動、発熱、硬直。いつも赤く動いてい
ます。細胞膜に閉じ困められた炎の色です。

立ち止まるとタンポポ

あしもとに

もう花も種子も尽きて

手持ちぶさた気に揺れている

ふいにつむじから

血と肉とが

溢れ出す

あ
か
あ
か
と

あいさつ

走っていないと追いつかれるぜ

フレッドがよくそう言ってたっけ

でも、いつまでも走ってるわけには

いかないだろう

いつまでも

おんなじところを

立ち止まる

振り返る

こっちに来るのは誰だ

身構える

耳を澄ます

明かりなんかなくても

じきに目が慣れるさ

突然遠くで花火が鳴る

苦しそうに光って消える

痩せた肩の向こうで

小さく

微かに

さあ追いついたぜ、フレッド

どんな挨拶をしようか

迷途

いつからだろう。男はいつも間違った場所にいた。間違った道を間違った方向に間違った歩き方で歩いていった。だから思いもかけない三叉路に出くわし、驚かされることもしよっちゅうだった。そんなとき男は必ず自分の考えとは逆の方に進んでしまう。まれには思った通りに足を運べることもあったが、それはそれで、そもそも間違った道を選んでしまっていた。もうどこにも出口はなかった。

ある朝、男は珍しく車で出かけた。これもまた別の誤りの始まりであった。いつもの間違いが加速を重ね、あつというまに見知らぬ土地へと男を連れ去った。男は途方にくれた。どこにでもあるような、これといった特徴もない住宅街をのろのろとさまよった。ちょうど下校の時刻なのだろう。ランドセルをしまった子どもたちが怪訝そうにこちらを見ている。その視線に氣をとられた瞬間、仔猫が車の前を横切った。

男はとっさにブレーキを踏もうとした。だが、その判断が本当に正しいのか、ひどく疑わしく思われた。男は躊躇した。迷った。仔猫の姿が消えた。仔猫の身体は軽過ぎて、微かな衝撃さえ残さない。ミラーの中で二、三度大きく跳ね、それきり動かなくなった。車道を渡り終えていた母猫が仔猫のもとに戻ってきた。しばらく我が子の耳や背を舐めていたが、一向に目覚める気配もなく、とうとう諦めて去って行った。

男は車を止め、ハンドルに顔を伏せた。通りすぎる子どもたちの冷たい視線。何台かの車が反対車線を抜き去って行った。あれから何時間たったのだろうか。フロントガラスの向こうから赤い光が差し込んできた。ふと顔を上げると、いつまでもまっすぐな道の果てに太陽が低くぶら下がっている。男はエンジンをかけ、アクセルを踏んだ。どこまでも西へ。日の沈む場所へ。そこが出口でなくても構わない。

そのころ子どもたちは、母親に耳を引っ張られたり、

背中を叩かれたりしながら、布団にしがみついていた。
朝が来るのはいつも早すぎる。死んだ仔猫の夢が未だ
頭の中でざらついていた。

あとがき

自分は何のために生きているのだろう、ある時、ふと、そのような意味のことを父が呟いた。四十にもなつて、そんなことを言うのは、自覚的に生きてこなかった証拠だ、生意気盛りの高校生だった私は、聞こえぬふりを決め込みながらも、胸のうちでは、そんな風に思っていた。

あれからもう二十年以上経つ。早いものだ。いつの間にもやら当時の父と同じような年齢になってしまった。自覚的に生きてきたかどうかは分からないが、いずれにせよ、私も未だ不惑の境地からはほど遠い。日々、戸惑い、日々、迷いながら生きている。

この迷い途は冥土に至るまで続くのだろう。そう予感してさえいる。されば、野に踏み惑う日々から、さやかな作物をつむぎ出し、それをせめてもの手みやげに、さらに遠く、さらに奥深く、迷いこんでゆくほかない。

みやげ物らしく口上を述べておこう。」「には十代の後半から二十代の始めに書いた作品を納めた。「空へ」と「この赤いのは」は高校の文芸部誌『KYLEE-DANCE』に、他は全て同人誌『対流』に発表したものだ。

その後、十年にわたり詩を書かなかった時期がある。始めは卒論に専念するための休筆のつもりだったが、就職、結婚、子どもの誕生と日常の暮らしの中で責任が増えるにつれ、詩への想いは後ろめたいものとなった。

だが、いくら抑えたところで、抑えようのないものは、或る日、突然、爆発するほかなかった。「」にはその頃の作品が納められている。いずれも初出はニフティサーブ（現@ニフティ）の『詩のフォーラム』である。

最後の「」には、ここ五年ほどの間に書かれたものから採った。『詩のフォーラム』を辞し、個人サイト『矮猫亭』(<http://kigaru.gaiax.com/home/saku>)を開設してからの作品だ。今日に至るまでここが私の主な創作活動の場となっている。

最後になっただが、表紙と挿絵を描いてくれた米川リヨク氏に、盟友、神居光紀氏と吉沢弘之氏に、そして『矮猫亭』の読者諸氏に感謝の意を表したい。

二〇〇三年十月八日 車中にて

ならぢゅん

発行	二〇〇三年十一月一日
著者	ならぢゅん
表紙絵／挿絵	米川リヨク
発行者	ならぢゅん
連絡先	j.nara@nifty.com